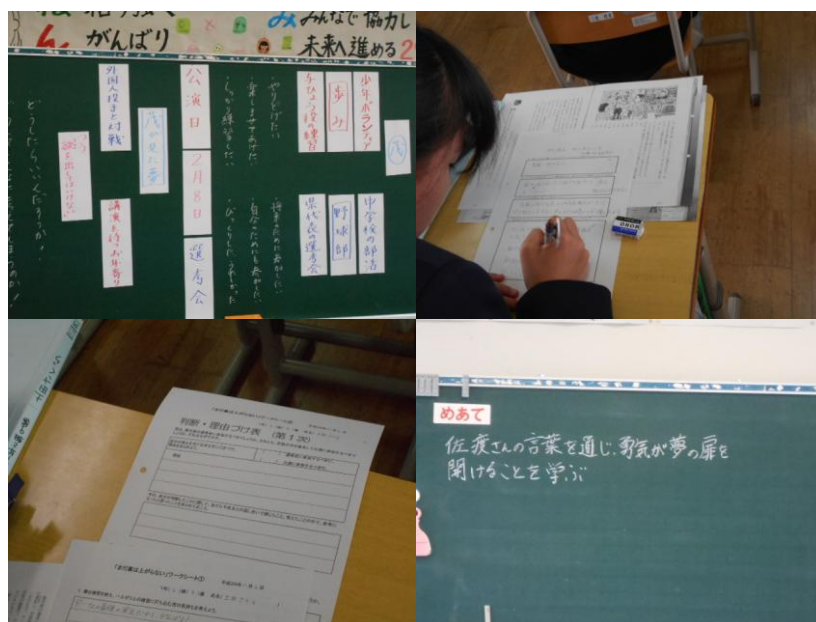


平成 29 年度

道徳教育実践研究事業推進校発表会

学習指導案



丹波市立春日中学校

平成 30 年 2 月 5 日

目 次

- 1 1年3組 「楽しいことをやり続けることで夢がかなう」 . . . 1
- 2 2年2組 「戦場の県知事 島田叡さん」 . . . 6
- 3 3年2組 「地図をもたない旅人―湯川秀樹―」 . . . 11

<裏表紙より>

- 4 「地図をもたない旅人―湯川秀樹―」本文資料 . . . 21
- 5 「戦場の県知事 島田叡さん」本文資料 . . . 25
- 6 「楽しいことをやり続けることで夢がかなう」本文資料 . . . 27

第 1 学年道徳学習指導案

授業者 岡田 豊基

- 1 日 時 平成30年2月5日(木) 5校時
- 2 学 級 1年3組 30名
- 3 主 題 希望と勇気、克己と強い意志 1-2 (A-4)
- 4 資 料 『楽しいことをやり続けることで夢がかなう』(出典：心かがやく)
- 5 ねらい 夢をかなえるために一番大切なことは何かを考えさせる
- 6 指導にあたって

(1) 生徒観

本学級の生徒は明るく元気である。授業中もよく発表をする生徒が多い。しかし深く考えた発言ができる生徒は少なく、思いつきで話をしてしまう生徒が多い。また、自己主張の強い生徒も多く、自分が当てられないと、次は発表したくないといった、精神的に成熟できていない生徒もいる。その反面、なかなか自分の意見が言えない生徒もいる。これまでの授業で、考える時間を作ることや、少人数グループの中で気軽に意見を交換できるようなことを心がけてきた。その中で少しずつだが誰もが発言ができる雰囲気を作れるようになってきた。

(2) 教材観

兵庫県出身のパラリンピック銀メダリストの円尾智彦さんの生き方を通して、夢について考えさせる教材である。事故による挫折からの立ち直りや、様々な人との出会いからの新たな目標への取り組みなど作者の心の変化を感じる事ができる。また自身の成功体験から夢をかなえるために大切なことは、楽しいと思える事をやり続けることだと訴えかける教材である。

(3) 指導観

夢とは何かということや、それをかなえるために最も大切なことは何かということや、それを訴えかけていきたい。まず自分自身も夢(目標)を考えさせ、それを達成するためにすべきことを考えさせる。そして、円尾さんの考えと自分の考えを比較させることで、違いや共通点に気づかせたい。そしてさらに目標を達成するためにどのようなことをしていけばいいかを深く考えさせていきたい。

- 7 準備物 心かがやく(P92~) ワークシート 写真

8 展開

	学習活動	指導上の留意点
導 入	<p>1 自分の夢や目標を考え発表する あなたの夢（目標）は何ですか。 予想される回答 （教師 保育士 スポーツ選手 etc）</p> <p>2 その夢を達成するために必要なことを考え発表する 夢をかなえるために大切なことはなんだと思いますか 予想される回答 （勉強 あきらめない 我慢 etc）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2学期末に私たちの進路を使い進路学習をしたことを思い出させる。また文化祭において職業調べを行ったことも押さえておく。 ・ できるだけ多くの生徒に発表させる。時間をあまりかけさせないようにこちらからどんどん指名していく
展 開	<p>3 心かがやく P 9 2～9 3を読む</p> <p>4 ワークシートに沿って本文の内容を整理していく</p> <p>① 主人公は誰ですか</p> <p>② もともと何に力を入れていましたか</p> <p>③ 大学1年生で起こったできごとは何ですか</p> <p>④ その時の円尾さんの気持ちを答えなさい</p> <p>⑤ 円尾さんの気持ちを変える出来事を答えなさい</p> <p>⑥ 円尾さんが新たに始めたことは何ですか</p> <p>⑦ そこでの成績を答えなさい</p> <p>⑧ 次に円尾さんが挑戦したことを答えなさい</p> <p>⑨ その成績を答えなさい</p> <p>夢をかなえるために大切なことは何だと考えていますか</p> <p>5 作者が言う楽しいこととは何かということを考える（班で交流しながら考える）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が範読する。 ・ 本文に従ってワークシートをまとめさせる。 ・ 最後の質問の答えは、この文章のタイトルにもなっているので、その意味についてさらに深めるように、次の展開に進んでいく。 ・ 部活や勉強をしていく中で自分が楽しかったことは何かを考えさせる。 ・ 途中で夢が変わってもよいことや、主人公の言ったことだけが正しいのではないことを押さえておく

	<p>作者は楽しいことを続けることが夢をかなえることになると言っているが、楽しいこととはいったいどんなことですか</p> <p>6 班で交流したことを代表が全体に発表する 予想される回答 (みんなでやること 自分からやっていくこと 達成感があること せいかがあらわれること しんどくてもあきらめないこと etc)</p>	
ま と め	<p>7 本時の振り返りをワークシートに記入する</p> <p>8 自分の考えを発表する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えと、この作者の考えを比較しながら感想を書くように指導していく。 ・自分の夢を達成するために（見つけるために）これからどのように、何に取り組んでいくべきなのかを考えさせる

教材分析シート 主人公が道徳的価値の自覚をする場合		主題・内容項目	希望と勇気、克己と強い意志1-2(A-4)
5	楽しいことをやり続けることで夢がかなう(心かがやく)	中心発問以外の場面の発問 (場面の叙は教材による)	予想される児童生徒の反応(答)
6	<p>教材名(出典)</p> <p>1 教材を読む(骨格をつかむ)</p> <p>①生き方を自覚したのは誰か(主人公)</p> <p>②生き方を自覚することになった出来事はなにか</p> <p>③生き方を自覚するのはどこか</p> <p>円尾智彦 パラリンピックのアイスレスリッジホッケー競技で銀メダルを獲得した</p> <p>楽しいことをやり続けることで夢がかなうことを知った。</p> <p>2</p> <p>＜構図＞</p> <p>体操競技に力を入れ取り組んでいたが、事故にあい自暴自棄になる</p> <p>before</p> <p>出来事(助言)</p> <p>同じ病棟の高校生と出会い、自分の小ささを知る</p> <p>いろいろな人との交流の中で車いすバスケットを始める</p> <p>40歳でアイスレスリッジホッケーを勧められのめり込む</p> <p>自覚</p> <p>↑</p> <p>国体準優勝 パラリンピック銀メダル</p> <p>楽しいことをやり続けることで夢がかなう</p> <p>after</p>	あなたの夢は何ですか	・スポーツ選手 ・youtuber・保育士・教師・看護師・パティシエ・調理師・整備士・プログラマー・デザイナー
7	楽しいことはどんなことですか？	夢をかなえるために何が大切だと思いますか	・努力・勉強・ひらめき・忍耐・好きだということ
8	<p>中心発問</p> <p>楽しいことはどんなことですか？</p> <p>4 中心発問に対する予想される生徒の反応(答え)</p> <p>・みんなで取り組みむこと ・自分の成長がわかること ・あきらめずにつづけること ・成果が形となって表れる事 ・しんどいことをやりぬいたとき</p> <p>補助発問(道徳的価値をさらに深く考えられるように問を準備する)</p>	ねらい	<p>(A)パラリンピックで銀メダルを獲得した</p> <p>(B)強い意志をもってやりつづける夢を達成しようとする</p> <p>(C)道徳的实践・意欲と態度を育てる</p> <p>※書き方 (A):教材の活用を簡潔にする。(主人公が道徳的に変化する場合は、「出来事(助言)」の部分抜き出して表記する。) (B):内容項目から適切に抜き出す。 (C):道徳性の要素(道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度)を入れる。</p>
8	本時で考える道徳的価値(*上記「7」の(B)の理解)	夢や目標というのは成長や時間の経過で変わっていてもよいものである。しかしそれを達成するためには努力が必要不可欠であるが、何事も楽しいことをやり続けることがそれへの一番の近道であること。	

第2学年道徳学習指導案

授業者 村井 隆宏

- 1 日時 平成30年2月5日(月) 5校時
- 2 学級 2年2組 32名
- 3 主題 希望と勇気・強い意志 1-2 (A-4)
- 4 資料 『戦場の県知事 島田勸さん』(出典:心かがやく)
- 5 ねらい 戦前最後の沖縄県知事である島田勸さんの生き方を知り、リーダーとして在るべき姿や価値のある生き方について考える。

6 指導にあたって

(1) 生徒観

本学級は落ち着いた雰囲気での学習に取り組む、教師の話を受ける生徒が多くいるが、挙手などをして進んで発表するという積極性には欠ける面がある。個人の意見や思いを持っている生徒が多いため、感想文など個人での取り組みでは個性的な面を見ることができる。

(2) 教材観

本教材は、戦前最後の沖縄県知事となった島田勸について書かれた文章である。太平洋戦争末期、沖縄は戦場になることが必至の状況で、島田さんは沖縄県知事としての辞令を受けた。ほかの官僚たちがその辞令を断る中で島田さんは快諾して沖縄に赴き、戦場の県知事として出来る仕事を最大限努力して取り組んだ。その姿が沖縄県民の心を動かし、戦後異例の早さで「島守の塔」という慰霊碑が建てられることとなった。このことから、どのような生き方が人の心を揺さぶり、人として価値のある生き方なのか考えられる教材である。

(3) 指導観

戦況の悪化する沖縄県の知事として辞令を受け、断ることもせずその職務を全うした島田さんの生き方から、自分に任された役割を果たす責任感について考えさせたい。自分のやるべき事をやりきることで周囲の人の心を動かすことができることや尽力する人の頑張りを認められる道徳的心情を伸ばしたい。これらの学習を通して、自分たちの実際の生活を見直し、人として価値のある生き方とは何か考え深める機会としたい。

- 7 準備物 ワークシート、写真

8 展開

段階	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>○本時の学習内容確認をする ○本文を読む</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">◎「戦場の県知事 島田叡」とはどんな人だろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・「戦争の時の知事」 ・「沖縄県のこと」 など 	<p>「価値のある生き方とはどんな生き方か考えを深める」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「沖縄」、「大阪から来た」、「神戸(兵庫)出身」、「官選の知事」ということを押さえる。 ○テンポよく質問し、学習内容について興味関心を高める。
展開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">◎心かがやくP.11の写真を見て、「島守」という言葉の意味を考えよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・「島を守る」 ・「島の偉大な人」 など <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">◎沖縄の人たちは終戦後、なぜ異例の早さでこの塔を建立したのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・「島田さんにととても感謝している」 ・「悲しくてしょうがない」 ・「島田知事のことを忘れないために」 など <p>○資料を読み取りながら、島田さんの行動は沖縄県の人たちにとってどう見えたのか、考える</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">◎後世の人々から「忘れてはいけない人」と言われる人とは、どんな人だろう。</div> <p>○班でグループを作り、相談する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分を犠牲にできる」 ・「自分のことより、みんな(住民)のことを優先できる」 ・「先頭に立って、行動できる」 など 	<ul style="list-style-type: none"> ※黒板に島守の塔の写真を貼る ○なぜ「島田叡の慰霊碑」という名ではないのか問いながら、言葉の意味を考えさせる。 ・島の守る人 ・島の番人 ・<u>島の住人</u> <p>○沖縄県民の行動から、島田知事へ対する思いについて考えさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ※資料の読み取り ○島田知事の言動や行動について整理し、沖縄に対してどんな利益をもたらしたか確認する。 ・「正確な情報を知れた」、「知事を断ることができた」という二つの立場について押さえておく <ul style="list-style-type: none"> ※班隊形にさせる ○人として値打ちのある生き方を知り、リーダーとしての在り方を考えさせる。 ○班でまとまったら、クラス全体で発表させる
まとめ	<p>○授業の感想を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○どんな生き方が理想かを考えさせる。 ○修学旅行で行く沖縄には、兵庫県とも深い関わりがあり、深く学習した上で行くことを伝える。

戦場の県知事 島田叡さん

2年 組 番 氏名 ()

1. 「島守」という言葉の意味を考えよう。

なぜ、「島田叡慰霊碑」ではないのか…？

2. なぜ沖縄の人たちは、戦後異例の早さでこの塔を建立したのだろう。自分の言葉で考えて書いてみましょう。

⇒島田さんの行動とは…

1945年1月 ①()の()が下った。

「俺は死にたくないから、だれか替わりに行って、②()、とはいえない。」

4月1日米軍上陸作戦

「住民を置いて、③()退避することはできませんよ。」

◎『沖縄県後方支援挺身隊』を結成

- ・④()の調達
- ・⑤()の指導
- ・⑥()伝達。
- ・住民の先頭に立って⑦()、()。

「もはやこれまでです。今後の行動は自由です。どうぞ⑧()を長らえてください。」

6月14日 戦死 その詳細は分かっておらず、遺骨も見つかっていない

3. 後世の人々から「忘れてはいけない人」と言われる人とは、どんな人だろう。

①自分で考えた事

②班で話し合っって気づいた事

◎この授業を通して、「心に感じたこと」、「自分自身の経験や生活とつながること」、「人としての価値はどこで決まるか」、「どんな生き方が理想なのか」など、考えたことを感想として書きましょう。

A large rounded rectangular box with a black border, containing 25 horizontal lines for writing. The lines are evenly spaced and extend across the width of the box.

教材分析シート 主人公が道徳的価値の自覚をする場合

教材名(出典)	戦場の県知事 島田勲さん(心かがやく)		主題・内容項目	希望と勇氣、克己と強い意志 1-2(A-4)
1 教材を読む(骨格をつかむ)	①生き方を自覚したのは誰か(主人公) ②生き方を自覚することになった出来事はなにか ③生き方を自覚するのはどこか	島田勲 戦況の芳しくない沖繩県へ、知事への辞令を受けた事 「俺は死にたくないから、だれかに替わりに行って、死ぬ、とはいえない」	中心発問以外の場面の発問(場面の教は教材による)	予想される児童生徒の反応(答)
2 <構図>			場面	「島を守る」 「島の偉大な人」 沖繩の人たちは終戦後、なぜ異例の早さでこの塔を建立したのだろう。 「島田さんにとでも感謝している」 「悲しくしようがない」 「島田知事のことを忘れないために」
3 中心発問	「後世の人から「忘れてはいけない人」と言われる人とは、どんな人だろう。」		ねらい	(A) 戦場の県知事の辞令を受けた 道徳的に変化する主人公を通して
4 中心発問に対する予想される生徒の反応(答え)	自分の都合を後回しにしてでも、みんなのためにできることをすること。 社会全体のために、全力を尽くした人。 強い責任感を持って、役割を果たせる人。 世のため、人のために尽くせる人 自分の命を省みない ※「自己犠牲は良い＝特攻すべき」という考えを肯定しないように留意する 補助発問(道徳的価値をさらに深く考えられるように問を準備する) 「どんな行動が人の心を動かすことができるか。」		(B) 克己と強い意志を持って行動しようとする (C) 道徳的実践意欲と態度を育てる	※書き方 (A):教材の活用を簡潔にする。(主人公が道徳的に変化する場合は、「出来事(助言)」の部分を抜き出して表記する。) (B):内容項目から適切に抜き出す。 (C):道徳性の要素(道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度)を入れる。 本時で考える道徳的価値(*上記7)の(B)の理解 内務官僚としてエリートコースを歩んできた島田勲は、戦況の悪化する沖繩に県知事として赴任することを快諾し、その仕事に全力を尽くした。自分に与えられた仕事に責任感を持ち、自分の利益や都合を度外視して、沖繩県民のために行なうべき最大限の行動を取ったことで、後世に語り継がれる人物として認められるようになった。 その生き方を通して克己心について考え、自分に任されたことに対して責任感を持って取り組もうとする姿勢が形成されることが大前提である。

第3学年道徳学習指導案

授業者 足立 恵五郎

- 1 日時 平成30年2月5日(月) 5校時
- 2 学級 3年2組 35名
- 3 主題 真理の探究、創造 1-4 (A-5)
- 4 資料 地図をもたない旅人―湯川秀樹― (出典：心かがやく)
- 5 ねらい 真理を愛し、わからないことを謙虚に受け止め探究しようとする道徳的心情を育てる。

6 指導にあたって

(1) 生徒観

本学級の生徒は、明るく授業中の発表などにも積極的であるが、発表者が一部に限られてしまうということがある。とりわけ、正解のない問題に対して自分の意見を持つことに苦手意識を感じている生徒は少なくない。そのことは、道徳の授業や感想にも見られ、二年時から課題克服に向け、自分の考えを安心して発言できる集団作りに努めてきた。そのため、小グループでの話し合い活動などの場において、実生活と結びつけて率直な意見や考えを持つことや、それらを周囲に伝えることができる生徒が増えつつある。

(2) 教材観

この資料は、理論物理学の研究において成果を挙げ、日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹の生き方を題材にしている。日本人には不可能であると言われる中、湯川秀樹はほとんど独学で研究をすすめ、逆境にあっても未知へのあこがれを捨てることはなかった。何度も壁にぶつかり、苦悩しながら、わからないことをわかろうと探究を続けた湯川秀樹の生き方を通して、真理を愛し、わからないことを謙虚に受け止めて探究しようとすることの大切さを感じ取ることができる教材である。

(3) 指導観

湯川秀樹の生い立ちや人柄、妻とのやりとり、当時の物理学界の状況などに触れながら、湯川秀樹の探究者としての姿勢を一つの理想の姿として感じ取らせたい。真理を愛し、わからないことを謙虚に受け止める道徳的心情はもとより、自分たちの実際の生活を見つめ直し、どうすれば理想の自分に近づくことができるのか、生徒一人ひとりが率直に考え、言葉にして周囲に伝えられる機会としたい。

- 7 準備物 ワークシート、写真

8 展 開

	学習活動	指導上の留意点
導 入	<p>1 今日の資料に興味を持つ。 この人は誰でしょうか。</p> <p>2 日本人初のノーベル賞受賞者である湯川秀樹の人物像や生き方について考えることを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を提示する。 ・めあてを確認する。 ・ノーベル賞について簡単に触れる。 ・湯川秀樹の生い立ちについても簡単に触れる。
展 開	<p>3 資料「地図をもたない旅人」を読む。</p> <p>4 湯川秀樹の人物像をとらえる。 湯川秀樹とは、どんな人物だったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数学が好き ・賢い ・まじめ ・研究熱心 ・負けず嫌い ・あきらめない など <p>5 湯川秀樹はなぜノーベル賞を受賞することができたのか考える。 妻の言葉に答えた通り、湯川秀樹がノーベル賞を受賞することができたのはなぜだろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論物理学に対する情熱を逆境にも負けず燃やし続けたから。 ・たとえ認められなくても、もっと凄いのを書いてやろうと自分を鼓舞することができたから。 ・未知へのあこがれの気持ちを持ち続け、自分を信じてあきらめなかったから。 <p>未知のものに対してとき、今の自分はどうしているか、考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すぐにあきらめてしまう。 ・なんとかしようと思ってみるがうまくいかず結局はあきらめる。 ・どうしても必要なときは頑張るが、あまりすすんで理解しようとはしていない。 ・分かるまであきらめずに問題に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が範読する。 ・個人で考えさせる。 ・研究者としての素地がもともと備わっていたことをおさえる。 ・本文を読み進めながら、適宜、加筆するよう促す。 ・「未知への探究心」を最後に特筆すべき点として書かせる。 ・個人で考えさせる。 ・グループで意見を出し合い考えさせる。 ・他者の意見を青で記入させる。 ・全体で交流をおこなう。 ・他グループの意見をワークシートに赤で記入させる。 ・未知のことを解決することに心を揺さぶられる姿から「わからないことをわかろう」という意識が強くなることをおさえる。 ・個人で考えさせる。 ・率直に書くようながす。 ・理想（湯川秀樹）と現実（自分）のあいだにどのような違いがあるのかを見つめさせる。 ・グループを解体する。

<p>ま と め</p>	<p>6 今日の授業を振り返りながら自分の考えを書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「未知の世界を探求する人々は、地図をもたない旅人である」という言葉で、彼は私たちにどんなことを語りかけようとしたのだろうか？感想を交えて書いてみよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・真理を追究することにゴールはないのだよ。 ・わからないことを悩み続けることが大切なのだよ。 ・なぜと問い続けることが楽しいことなのだよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・湯川秀樹のメッセージとして文章化させたのちに、感想を書くよう指示する。(文体を指定する) ・数人に発表させる。 ・湯川秀樹の生き方から、「真理を追い求めることは、わからない苦悩の連続であり、わからないことを謙虚に受け止めて探求し続けること」が大切であることをつかませる。
----------------------	--	--

「地図をもたない旅人」～ 湯川秀樹 ～

3年 組 番 氏名 ()

① 湯川秀樹とは、どんな人物だったのだろうか？

思いっくままに挙げてみよう (黒)	特筆すべきは (赤)
-------------------	------------

② 妻の言葉に答えた通り、湯川秀樹がノーベル賞を受賞することができたのはなぜだろう？

自分で考えたこと (黒)	
グループで出た意見 (青)	他グループから出た意見 (赤)
今の自分はどうしているか (黒)	

③ 「未知の世界を探求する人々は、地図をもたない旅人である」という言葉で、彼は私達にどんなことを語りかけようとしたのだろうか？ 感想とともに書いてみよう。

湯川秀樹から受け取ったメッセージ (黒)
自分の感想 (黒)

教材分析シート 主人公が道徳的価値の自覚をする場合

教材名(出典)		地図をもたない旅人 - 湯川秀樹 - (心かがやく)		5	主題・内容項目	真理の探究、創造 1-4 (A-5)	
1	教材を読む (骨格をつかむ)	①生き方を自覚したのは誰か(主人公)	湯川秀樹	5	中心発問以外の場面の発問 (場面の数は教材による)	予想される児童生徒の反応(答)	
		②生き方を自覚することになった出来事はなにか					未知のものに対してのとき、今の自分はどうしているか、考えてみよう。
		③生き方を自覚するのはどこか					未知のものに対してのとき、今の自分はどうしているか、考えてみよう。
<p><構図></p>				6	場面	<p>すぐにあきらめてしまう。 なんとかしようと試みるがうまくいかず結局はあきらめる。 どうしても必要なときは頑張るが、あまりすすんで理解しようとはしていない。 分かるまであきらめずに問題に取り組もうとしている。</p>	
2	中心発問	<p>「ノーベル賞は日本人にはいただけないものだと聞きました。」</p> <p>「いや、どこの国の人だってもらえる。」</p> <p>「いや、どこの国の人だってもらえる。」</p> <p>自覚</p>	<p>「未知の世界を探究する人々 は、地図をもたない旅人である」 という言葉で、彼は私たちにどんなことを語りかけようとしたのだらう？ 感想を交えて書いてみよう。</p>	<p>真理を追究することにゴールはないんだよ。 わからないことを悩み続けることが大切なのだよ。 なぜと問い続けることが楽しいことなのだよ。</p>			
3	中心発問	<p>妻の言葉に答えた通り、湯川秀樹がノーベル賞を受賞することができたのはなぜだろう？</p>	7	ねらい	<p>(A) 逆境の中にあっても、未知へのあこがれを捨てず、探究することをやめなかつた。 (B) 理想を実現しようとする (C) 道徳的心情を育てる</p>		
4	中心発問に対する予想される生徒の反応(答え)	<ul style="list-style-type: none"> 理論物理学に対する情熱を逆境にも負けず燃やし続けたから。 たとえ認めてもらえなくても、もっと妻いものを書いてやろうと自分を鼓舞することができたから。 未知へのあこがれの気持ちを持ち続け、自分を信じてあきらめなかったから。 <p>補助発問(道徳的価値をさらに深く考えられるように問を準備する) 未知のものに対してのとき、今の自分はどうしているか、考えてみよう。</p>	8	本時で考える道徳的価値(*上記「7」の(B)の理解)	<p>未知のもの、分らないものに対する謙虚であきらめない心を持つことこそ理想を実現するためには欠かせないものであり、大切であるということ。</p>		



湯川 秀樹（ゆかわ ひでき）明治四十（一九〇七）年～昭和五十六（一九八一）年

東京都出身。物理学者。中間子理論の提唱などで原子核・素粒子物理学の発展に大きな功績を挙げ、一九四九年、日本人として初めてのノーベル賞（物理学賞）を受賞した。京都大学名誉教授。大阪大学名誉教授。一九四三年に文化勲章。西宮市苦楽園に住んでいた。

一九四九（昭和二十四）年、この研究で湯川は、日本初のノーベル賞を受賞した。西宮市苦楽園で思いついたこの粒子は、後年「ユカワ粒子」と呼ばれるようになり、陽子と中性子の中間ほどの質量であるために「中間子」と命名される。

湯川に続き同期生の朝永振一郎も、一九六五（昭和四十）年に量子電磁力学分野での基礎的研究でノーベル物理学賞を受賞し、その後も多くの日本人受賞者が誕生した。

それでも日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹は特別な存在であり、戦後の日本に知的な勇気を与えた人物である。

西宮の住まいの近くにある小学校に、彼の教え子たちが建てた湯川の記念碑がある。

「未知の世界を探究する人びとは、地図をもたない旅人である」

湯川の意志は今も生き続け、記念碑に刻まれたこの言葉に励まされる研究者が、今も研さんを積んでいる。

10

研さん
学問などを深く究めること。

5

開けた時、桜の葉の間から落ちてくる陽の光を見たことを思い出していた。

「あっ！」

湯川は布団をガバッとめくって上体を起こした。

「あれや！」

湯川は叫んだ。

あの時、湯川は無数の光の「粒」を見たのだった。

「粒だ。陽子と中性子の間にきつと何かの粒があるんだ。これが、この二つをくつつけているに違いない。」

湯川の頭に浮かんだ幼いころに見た光の粒が、世紀のひらめきを導いたのだった。あれだけ悩んでいた陽子と中性子を結びつけている力が見えた瞬間であった。

湯川はこの時のひらめきをもとに、その年「中間子理論構想」を発表し、翌一九三五（昭和十）年に「素粒子の相互作用について」と題する論文を発表した。

しかし、発表当時、湯川の論文は世界の物理学会で冷たくあしらわれた。欧米を中心にして発展してきた物理学に、日本などはお呼びではないといった風潮があった。ちょうどそのころは、戦争を進める東洋の野蛮な国という印象や、日本を仮想敵国とみなしていた国の反応が冷たかったという事情もあつたろう。日本の物理学は、なかなか世界の舞台で認められることはなかった。このような状況にあつても、湯川は悲観しなかった。

あの粒のひらめきを思い出しながら、湯川はつぶやいた。

「未知の世界はまだまだ果てしなく広がっている。まだまだ、研究はこれからだ。」
湯川の目には、自信が満ちあふれていた。

* * *

仮想敵国
国防計画などを立てる場合
に、仮に敵国と想定する国。

西宮市苦楽園にあった。湯川は部屋で物音を聞いたり、庭にだれかがいるように感じたり、戸締まりを気にしたり、神経がだいぶすり減っていた。

湯川は、原子核内の陽子と中性子を結びつけている力は何かを考えていた。湯川は、考えた理論を計算式を立てて確かめてみる。

「うまくいかん。あかん……」

何度も何度も失敗は繰り返され、あらゆる解決への糸口が、研究に打ち込めば打ち込むほど次々に消え去っていった。

「四面楚歌、奮起せよ。」

ある晩、湯川は日記帳に記した。

しかし、あとになって思えば、このころがまさにノーベル物理学賞の受賞対象となる研究の、生みの苦しみの時間帯だったのだ。

一九三四（昭和九）年九月二十一日、のちに日本の三大台風の一つと呼ばれる室戸台風が日本を直撃した。全国で数千人の死者や行方不明者が出るという大災害となった。「台風一過」とは、台風が通り過ぎて、風雨がおさまり晴天になることを意味しているが、室戸台風が通り過ぎてから関西地方は秋晴れが続いた。湯川の苦悩も晴れ渡る時がやってきた。

十月初めのある日の晩、湯川は布団の中で原子核について考えていた。その時だった。

「ジョウケンジ……」

湯川にある寺の名前が浮かんだ。

「そうだ、子供のころ兄貴たちとよく遊んだ寺だ。」

ある時、走り回っていて桜の根元で足を滑らせて倒れ、頭を強く打った。そして、仰向けのまま目を

四面楚歌 敵に囲まれて孤立し、助けがないこと。周囲の者が反対者ばかりであること。

室戸台風 一九三四（昭和九）年九月二十一日、室戸岬（むろつみ）付近に上陸し、京阪神地方を襲（おそ）った大型台風。

頑固な湯川に「負けず嫌い」というもう一つの性質が、こと物理の研究において内面に芽生えてきた。世界の同世代の研究者に対する湯川の闘争心が燃え上がってきたのである。

大学を出て三年目、縁談がもち上がった。

結婚して間もないころ、理論物理学の研究者である湯川に、妻となったスミが、

「学校でノーベル賞という賞があることを聞いたことがあります、あれは日本人にはいただけないと聞きました。本当なのでしょうが？」と尋ねたそう。湯川は、

「いや、どこの国の人だつてもらえる。」

と笑ったが、すぐに真顔になった。

時代は満州事変がぼつ発したころである。しだいに軍事色が強くなる社会情勢の中で、ノーベル賞の話など、世間ではまず出なかつただろう。しかし、どのような状況であっても、科学の発展、進歩のために研究を続ける者がいるのである。自分もいつそう努力しなければならぬと誓った湯川はスミに、

「これからぼくは世界中の物理学者のだれもが解けない難問に挑戦する。協力してくれるか。」と照れながら言ったという。

しかし、それからしばらくの間、湯川はさえなかつた。大阪の大学に移っていた湯川は、思い悩み、ふさぎ込んだ。世界の若い物理学者が原子核の構造を説明したり、中性子を発見したりしていたのだ。そういった情報は、負けず嫌いの湯川には相当なプレッシャーを与え、ストレスとなった。

スミは、湯川の焦燥を最小限にとどめようと、家庭において支え続けていた。そのころの住まいが、

20

15

10

5

満州事変
一九三一年、満
州(中国東北部)で日本軍
が鉄道の線路を爆(はく)
破して軍事行動を開始し、
満州を占(せん)領した。

原子核
原子の中心にあつて、陽子
と中性子からできている。

先生よりも高度な解法だったに違いない。

少年のころの湯川は、口数が少なく、そして頑固だったという。ただ数学が大好きで、難解な問題を解き明かすことが、楽しみだったようである。それも独自の方法を考案して解くことが無性に楽しかった。教科書だけでは飽き足らず、たくさん参考書や問題集を本屋で買い求め、数学を楽しむ日が続いた。

湯川の大学同期生に、年は一つ上だが同じく後にノーベル物理学賞を受賞する朝永振一郎がいる。朝永が「凡庸だがおもしろいアイデアの持ち主」と評するように、独特な発想力が湯川の持ち味だった。この時期の数学の思考法が湯川の独創的な才能を磨いたのだろう。

二年生になって物理の授業が始まった。湯川の興味はしだいに数学から物理に移り始めていった。英語で書かれている物理の教科書に示される難解な問題を解くことに、湯川はおもしろみを感じた。このころ、「量子論」の英訳本を読んだといわれ、「理論物理学は暗中模索の状態にある。これを解決する炎はまだ燃え上がっていない。これからの多大な努力が成功をもたらすことを期待する」というその本の最後の記述が湯川の心を大きく揺さぶった。

「物理学にはまだまだわからんことがぎょうさんある。よっしゃ、ぼくがそれを解いていってやる。」この時から、湯川の学問の道標が大きく理論物理学へと向き始めていった。

大学へ進み理論物理学を専攻した湯川は、卒業後も無給の助手として大学に残り研究を続けた。このころ、物質を構成する最小単位である原子のような極微の世界について説明できる新しい理論が発見され、世界の物理学の研究者は活気づいていた。しかし、我が国の大学にはそういった世界の最先端の理論を教授する先生がいない。湯川は自分で学ぶしかないと思ったことだろう。世界を見渡すと、湯川とさほど年齢の違わない若い研究者が活躍している。負けるわけにはいかなかった。

年は一つ上
湯川秀樹は飛び級している。

朝永振一郎
一九〇六―一九七九年。量子電磁力学の発展に寄与した功績によってノーベル物理学賞を受賞。

理論物理学
物理現象を理論的に研究する物理学の分野。

助手
旧制大学で、助手の下で研究の補助をする人。

地図をもたない旅人 — 湯川秀樹 —

「ユカワ相互作用」

「ユカワポテンシャル」

物理学の用語で「ユカワ」と名づけられ、現在も使用されているものがある。

「ユカワ」とは、「中間子論」を発表し、一九四九（昭和二十四）年に日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹、その人である。

東京オリンピックのころ、小学生だった世代の多くの日本人にとっては、ノーベル賞といえば湯川秀樹さんであり、湯川さんといえば、ノーベル賞だった。

* * *

湯川秀樹は一九〇七（明治四十）年、小川家の三男として東京で生まれたが、一歳の時に京都に転居した。姓が小川から湯川になるのは、一九三二（昭和七）年に湯川スミと結婚し、湯川家の養子になつてからである。

湯川が、高等学校一年生の二学期のことである。数学試験の答案が戻された時、

「注意点を取ったものは、……小川、お前や。」

と先生に名指しされた。湯川は驚いた。答案用紙を見ると三問あるうちの一問の証明問題がペケになっていた。完べきな証明をしたつもりだった湯川は事情がわからなかったが、仲のよい友人が、

「あの先生は自分が講義中に板書した証明の通りやないと、点数くれへんのや。」

とささやいた。湯川は、このころから独創的な思考を得意としていたのだらう。おそらく証明の方法は、

15

10

5

中間子論
陽子や中性子の間の力は、「中間子」という粒（りゅう）子が行きつりされることで伝わりと提唱した理論。
ノーベル賞
ダイナマイトの発明者アルフレッド・ノーベルがスウェーデンアカデミーに寄付した遺産を基金とする世界的な賞。一九〇一年以降毎年行われ、物理学・化学・生理学および医学・文学・平和・経済学の六部門において、顕（けん）著（しやく）な功績のあった人に授与（じゆ）される。

陳舜臣



ちんしゅんしん

大正十三（一九二四）年生まれ 神戸市出身
小説家、歴史著述家。数々の名作を著し、直木賞をはじめ、文壇の各賞を受賞。歴史文学を通じて日本文化に大きく貢献してきた。現在、日本芸術院会員。

焼け跡の時代だった一九五一年、摩文仁の丘の一角に島田叡さんを慰霊する自然石でつくられた「島守の塔」が沖繩の人たちの手で建てられ、同時に『沖繩戦秘史 島田知事』の一冊が上梓された。戦後六年、まだ、その日を生き抜くのに懸命なころだった。戦後でも異例の早さで建ったこの「島守の塔」から、島田叡さんの戦場での言動が沖繩の人々の目にどう映っていたか察することができる。島田叡さん、享年四十五歳。

（PHPエル新書「沖繩の歴史と旅」より一部改）



南へ南へと密集した。そんな面もあったが、米軍によって細長い本島中央部を遮断されてしまったため住民は非戦闘地域の北部へ移動することができなかった現実もあった。

沖縄戦は九十日間で終わった。短期間の戦争ではあったが、太平洋戦争最大の地上戦だった。女性、子供を含め沖縄住民九万四千人が戦死し、沖縄出身の軍人、軍属二万九千人が戦場の露と消えた。沖縄のほとんどの文化財は修復不能に破壊された。

島田勲さんはそんな戦場の県知事だった。島田勲さんは県庁自体を「沖縄県後方支援挺身隊」と名前を変え、県庁職員に住民の先頭に立って避難、誘導に努める決意を促した。県庁職員も避難先の壕生活の指導、食糧の配送、情報伝達に奔走した。

戦況は一日一日と悪化した。日本軍の司令部はついに、もうそこから先は海という摩文仁まで後退した。島田勲さんをはじめとする県庁職員の「後方支援挺身隊」もそれにつづいた。いま、糸満街道を摩文仁の岬に向かう途中の糸満市伊敷には直径五十メートルもある垂直の洞窟が口を開けている。それが沖縄県庁の最後の地である。北からは圧倒的なアメリカの軍事力が迫ってくる。しかし、ここより先は太平洋。退避する陸地はなかった。

六月九日、島田勲さんは残っていた県庁職員と、行動をともにしていた県警警備隊に県庁組織の解散を告げている。

「もはやこれまでです。今後の行動は自由です。どうぞ命を長らえてください」

県知事最後の訓示だった。六月十四日、別の説では六月二十三日ともいうが、島田勲さんは荒井警察部長と少数の職員とともに「摩文仁の軍司令部に合流する」といい残して壕を出た。それが沖縄県第二十七代知事だった島田勲さんが確認されている最後の姿である。それ以来、今日にいたるまで島田勲さんの消息は途絶えたままである。戦死した場所も日にちも不明のままだ。沖縄戦が終わってから多くの県民が搜索したが遺骨も見つかっていない。

が「本土決戦を避けるための捨て石」であり、日本の戦闘態勢立て直しまでの「時間稼ぎの玉砕地」であることも知っていただろう。

赴任する三カ月前の一九四四年十月十日には那覇に大空襲があり、県庁のある那覇市は大きな被害を受け、太平洋戦争はすでに最終段階に入っていた。前任者の泉守紀知事がなぜ在職途中で県知事の椅子から降りたか。その事情も当然、島田叡さんの耳には入っていた。前知事は戦況のさらなる悪化を見越し、出張の名目で沖繩を離れ、ついに帰任しなかった。知事の候補に名前があがった官僚たちはみんな沖繩行きを断っていた。

島田叡さんはそれも、これもみんな承知していた。しかし、島田さんは仲間に、そして家族に、こうい残して沖繩に乗り込んだ。

「俺は死にたくないから、だれか替わりに行って、死ね、とはいえない」

沖繩に着任した島田叡さんが終始、沖繩住民と苦難をともにしたことは、戦後になって多くの沖繩の人たちが証言している。食糧の調達のため台湾にまで出掛けている。住民の本島北部への疎開にも尽力した。県庁職員には「住民を置いて、自分たちだけが退避することはできませんよ」と督促しつづけた。

島田叡さんが沖繩に赴任して日も浅い四月一日午前八時過ぎ、沖繩本島の西の海を埋め尽くしていたアメリカの太平洋艦隊は中部西海岸の北谷、読谷、嘉手納へ一斉に上陸作戦を開始した。アメリカの沖繩戦の目的は日本軍と南方、中国大陸方面の連絡網を断ち切り、沖繩を日本へ攻めのぼる基地にすることだった。

沖繩上陸作戦は、ほとんど無抵抗に近い状況で完了した。日本軍は司令部のある首里周辺に残存部隊のすべてを結集する作戦をとっていたのだ。上陸した米軍は圧倒的な軍事力で本島北部をまず武装解除し、つづいて首里、那覇へと南下した。住民は軍隊と一緒にいけば安全という心理もあり、島の

戦場の県知事 島田叡さん

ちん しゅんしん
陳舜臣

沖縄戦で忘れられない人がいる。

忘れてはいけない人もいない。

私は神戸で生まれ、神戸で育った。その人もやはり神戸で生まれ、旧制神戸二中を出ている。私は戦後の神戸の街で、その人を知っているという多くの人に出会った。忘れていないのは私だけではない。私だけではない。

その人の名は島田叡（一九〇一〜一九四五）という。戦前最後の沖縄県知事である。

島田叡さんは忘れ難い人である。その生き方に頭がさがるのだ。

偉い人だった。

旧制神戸二中を卒業した後、島田叡さんは東京帝大に進み、内務官僚として佐賀県書記官を振り出しに警察畑を歩み、一九四四年からは大阪府内務部長に着任し、エリートコースを歩んでいた。その島田叡さんに、一九四五年一月、県知事の辞令が下った。行先は沖縄だった。

平和な時代であれば、南国の、心やさしい人たちが住むエキゾチックな沖縄に島田叡さんは心はずむ思いで赴任したはずだ。

しかし、時代が悪かった。島田叡さんにも、この時代を生きただけの人々と同じように苛烈だった。一九四五年一月の沖縄は、この千年の歴史のなかでも最も険悪な明日を確実に予感させていた。ましてや島田叡さんは戦況の情報を的確に入手できる立場の内務官僚である。沖縄戦の現状も、今後の展開も決して樂觀できるものでないことは手にとるように理解していたはずだ。さらに言えば、沖縄戦

円尾智彦



まるおともひこ

昭和四十三（一九六八）年生まれ 太子町出身
 アイススレッジホッケー選手。事故で片足が不自由となり、体操競技を断念するも、バンク
 ーバーパラリンピックでは、アイススレッジホッケー日本代表として銀メダルに輝いた。

ました。その結果、代表選手に。しかし、自分が代表入りしたら落ちる選手もいます。心の底から喜ばせませんでした。また、自分が入ったことで負けたらどないしようというプレッシャーでいっぱいでした。

初めてのパラリンピック。日本の成績は、世界ランキング四位。前回、前々回ともに五位で終わっています。何としても今年はメダルを取りたいと強い思いがみんなにありました。順調に勝ち進み、準決勝まできた時の相手は、優勝候補で地元カナダ。カナダには数年一勝もしていません。断然相手のほうが格上です。しかし、監督の一言でみんなが変わりました。

「同じ人間、千回やったら一回は勝てるやろ。九百九十九回負けてもいいから今日の一回を勝とう。今日の日のために辛くてしんどい練習をこなしてきた。お前たちは強い、暴れてこい！」

結果は、三対一で日本が勝利！ 歴史的快挙とまで言

われました。選手、監督、コーチ、スタッフみんながリンクの真ん中で泣きました。

今までの人生、多くの楽しいことを経験してきました。しかし、いろいろな理由をつけて、途中であきらめたこともありました。今回、大きな目標に向かい、楽しく続けられたことが、良い結果に結びついたのだと思います。アイススレッジホッケーの競技歴は二年と短いですが、仲間と楽しみを感じながら、あきらめないで続けてきたことが夢をかなえたのだと思います。



楽しいことをやり続けることで夢がかなう

まるお ともひこ
円尾智彦

私は、中学、高校と体操競技に力を入れ、厳しい指導

の下、県内でも良い成績を残すことができました。大学でも体操競技に励んでいましたが、一年生の時、オートバイ事故により左足切断（太ももの半分から切断）という事故に遭いました。スピードの出しすぎによる自損事故で自分の不注意です。事故当時は、世界一不幸な人間だと落ち込み、だれとも会いたくないと、お見舞いに来てくれた家族や友人を追い返したこともありましたが、今後どうなっていくんだろうと不安で仕方なかったです。一生片足で格好悪い、恥ずかしいとも思いました。

しかし、同じ病棟で年下の高校生に出会いました。ラグビーの練習中、スクラムが崩れて首の骨を折り、首から下が全く動かない障害にも関わらず、明るく元気な姿を見た時、なんて自分は小さなことで悩んでいるんだろう、こんなことで悩んでたらいかんと、目が覚めました。それから、いろんな人と交流をもつようにしました。それが、きっかけで車椅子バスケットを始めました。ス

ポーツ好きな私は、すぐにとりこになり、大学時代には、全日本の合宿まで参加しました。

その後、就職を機に、スポーツから離れていました。仕事も一段落したころ、三十六歳で十二年のブランクを乗り越え、もう一度車椅子バスケットに挑戦しました。初めは、本気ではなかったのですが、やっていくうちにのめりこんでしまい、気がつけば、いつもバスケットゴールの下にいました。そのかいてもあって、神戸市代表として、兵庫のじぎく国体、翌年の秋田わかき国体で準優勝を飾ることができました。

そして、四十歳でアイスレジャホッケーを勧められ、またまたのめりこみました。誘ってくれた友人（バスケット時代からの友人）の石田選手が、「一緒にバンクーバーに行こう。お前と行きたいんや」と言ってくれました。その言葉に応えたい思いで、バンクーバーまでの二年間、毎週末、マイカーで片道六時間かけ長野県岡谷市まで通い、全くのど素人が年がいもなく、がむしゃらに練習し